

# 国語

E/P/G方式(2024)

- (注意事項)
- 1 問題文は24ページあります。
  - 2 解答は解答用紙の所定欄に記入してください。下書きは、問題冊子の余白を利用してください。ただし、回収はしませんので採点の対象とはなりません。
  - 3 解答はすべてマークセンス方式となっていますので、解答用紙の注意事項をよく読み解答してください。
  - 4 受験番号・氏名・フリガナは、監督者の指示に従って、解答用紙の所定欄に丁寧に記入してください。
  - 5 解答用紙にマークセンス方式の受験番号欄があります。受験番号をマークする際は濃く丁寧にぬってください。
  - 6 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページ落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。

第一問 次の文章は、小熊英二の著書の終章の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

すべての社会関係は、一定のルールに基づいて行なわれる、利害と合意のゲーム<sup>(a)</sup>である。ルールを無視して一方的に利害を追求すれば、合意が成り立たなくなる。相手の合意を得て、自己の利害を達成するためには、ルールを守らざるを得ない。そのことによって、ルールは少しずつ変形されながらも、維持されている。

こうしたルールは、歴史的経緯の蓄積で決まる。歴史的経緯とは、必然によって限定された、偶然の蓄積である。サッカーのルールは、人間の肉体を使ったゲームであるという必然の範囲内で、積み重ねられた偶然が決めていいる。それがどうしてラグビーのルールと違うのかは、歴史的経緯の相違という以外の説明はできない。

こうしたルールは、合理的だから導入されたのではない。そもそも何が合理的で、何が効率的か<sup>(b)</sup>は、ルールができたあとに決まる。ルールが変われば、何が合理的かも変わるのだ。

それは、できあがった完成形としての「文化」ではない。しかしサッカーで手を使えないのは不合理だといっても、歴史的過程を経て定着したルールは、参加者の合意なしに変更することはできない。

これまでも日本の雇用慣行の改革は叫ばれたが、その多くは失敗した。なぜかといえば、新しい合意<sup>(1)</sup>が作れなかったからである。一九九〇年代以降の「成果主義」も、労働者の合意が得られないため、士気の低下<sup>(2)</sup>や離職率の増大を招き、中途半端に終わることが多かった。

また改革が失敗したもう一つの理由は、他国の長所とみえるものを、つまみ食いして移入しようとするものが多かったからだ。

たとえばアメリカ社会で、差別が禁止されていること、透明性が重視されること、解雇が容易であること、キャリアアップが可能であること、学位取得競争が激しいこと、格差が大きいことなどは、一体のものである。これらのプラス面・マイナス面<sup>(c)</sup>を一体として、社会の合意ができていくからだ。

(中略)

社会は変えることができる。それでは、日本の「しくみ」は、どういう方向に変えるべきだろうか。

本書は政策提言書ではない。具体的な政策については、筆者がここで細部に分け入るより、社会保障や教育、労働などの専門家が議論することが望ましい。ここでは、どういう改革を行なうにしても、共通して必要と考えられる最低限のことだけを指摘したい。

もっとも重要なことは、透明性の向上である。この点は、日本の労働者にとって不満の種であると同時に、日本企業が他国の人材を活用していくうえでも改善が欠かせない。

具体的には、採用や昇進、人事異動や査定などは、結果だけでなく、基準や過程を明確に公表し、選考過程を少なくとも本人には通知することだ。これを社内／社外の公募制とくみあわせることができれば、より効果的だろう。

こうした透明性や公開性が確保されれば、横断的な労働市場、男女の平等、大学院進学率の向上などは、おのずと改善されやすくなる<sup>(3)</sup>と考える。それはなぜか。

これまでこうした諸点が改善されにくかったのは、勤続年数や「努力」を評価対象とする賃金体系と相性が悪かったためだ。近年では勤続年数重視の傾向が低下しているが、それでも上記の諸点が改善されないのは、採用や査定などに、いまだ不透明な基準が多いことが一因である。それを考えるなら、透明性と公開性を向上させれば、男女平等や横断的労働市場をソグイ<sup>(4)</sup>していた要因は、除去されやすくなるだろう。

過去の改革が失敗したのは、透明性や公開性を向上させないまま、職務給や「成果主義」を導入しようとしたからである。しかもその動機の多くは、年功賃金や長期雇用のコストを減らすという、経営側の短期的視点であった。そうした改革は、労働者の合意を得られず、士気低下などを招いて挫折することが多かった。

透明性を高めずに、年功賃金や長期雇用の廃止することはできない。なぜならこれらの慣行は、経営の裁量を抑えるルールとして、労働者側が達成したものだからである。日本の労働者たちは、職務の明確化や人事の透明化による「職務の平等」を求めなかった代わりに、長期雇用や年功賃金による「社員の平等」を求めた。ここでは昇進・採用などにおける不透明さは、長期雇用や年功賃金のルールが守られている<sup>(5)</sup>ダイシヨウとして、いわば取引として容認されていたのだ。

ここで、<sup>注1</sup>一九六三年の経済審議会が出した一連の答申が、実現しなかった経緯を考えてみよう。これが実現しなかった一因は、企業が経営権の維持にこだわり、透明性や横断的基準の導入を嫌ったことだった。透明性や横断的基準を導入しない代わりに、長期雇用と年功賃金で企業内労働<sup>注2</sup>と妥協したのが、その後の日本の経営だったのである。

企業が透明性の向上を嫌うがために、改革が進まない事例は、二〇一九年度から導入された「高度プロフェッショナル制度<sup>注3</sup>（高プロ）」にもみられる。これは、<sup>注4</sup>アメリカのエグゼクティブを参考に、残業代の適用外の働き方を作ろうとしたものだ。

だが厚生労働省は、二〇一九年四月末時点の「高プロ」適用者が、全国で一名だったと発表した。これを報じた新聞記事によると、労組の反対が

あっただけでなく、企業もこの制度を適用しただけでなかった。その理由は、高プロを導入した企業には過労防止策の実施状況を報告する義務があり、労働基準監督署の監督が強まるからだだったという。

つまり日本企業は、透明性を高めて高プロを導入するよりも、不透明な状態を維持して現状を続ける方を望んだのだ。この制度そのものの評価はさておき、透明性を高めることが、あらゆる改革と不可分であることを示す一例といえよう。

こうした状況にたいし、労基署の監督や透明性の向上を課さずに、高プロを企業が使いやすい制度にすればよいのではないか、という意見もある。しかしそんなつまみ食いの改革は、一九世紀の「野蛮な自由労働市場」に回帰しようとするようなもので、労働者が合意するわけがない。

二〇世紀の諸運動で達成された成果がしだいに失われ、一九世紀の「野蛮な自由労働市場」に近づいている傾向は、世界的にみられる。第3章で述べたように、労働運動が実現してきた協約賃金や、同一労働同一賃金による「職務の平等」なども、適用範囲が狭められてきているのが現実だ。どこの国でも近年は雇用が不安定化し、その社会ごとの「正規」とは異なる働き方が増えている。

日本でも、一九九〇年代以降の「成果主義」の導入には、戦前のシヨッコウに適用されていた出来高給の復活というものさえある。とはいえ日本の場合、一九世紀に回帰しても、コア部分に長期雇用と年功賃金が限定された世界に戻るだけである。

これはいわば、日本型雇用の延命措置にすぎず、筆者としては賛成できない。こうした(7)小手先の措置は、労働者の士気低下を招くだけでなく、短期的な賃金コスト(8)サクゲン以外の改革にはなりえないだろう。

透明性と公開性の向上は、どのような改革の方向性をとるにしろ、必須である。おそらくこのことには、多くの人も賛成するだろう。

だが透明性と公開性が高まり、横断的労働市場や男女平等などが達成されても、それで格差が解決するわけでは必ずしもない。評価の透明性が高まったぶん、客観的な基準としての学位取得競争が強まり、それによる格差が開くかもしれない。また「経験」と「努力」で高い評価を得ていた、学位を持たない中高年労働者の賃金は、切り下がる可能性がある。

筆者自身は、この問題は、「残余注5型」が増大している状況とあわせて、社会保障の拡充によって解決するしかないと考ええる。すなわち、低学歴の中高年労働者の賃金低下は、児童手当や公営住宅などの社会保障で補うのである。そうした政策パッケージを考えるにあたり、第6章で論じた一九六三年の経済審議会の答申は、いまでも参考になる側面がある。

だがそうはいっても、社会を構成する人々が合意しなければ、どんな改革も進まない。日本や他国の歴史は、労働者が要求を掲げて動き出さないかぎり、どんな改革も実質化しないことを教えている。そうである以上、改革の方向性は、その社会の人々が何を望んでいるか、どんな価値観を共

有しているかによって決まる。

社会の価値観をはかる、リトマス試験紙のような問いを紹介しよう。二〇一七年に、労働問題の関係者のあいだで話題をよんだエピソードがある。それは、スーパリーの非正規雇用で働く勤続一〇年のシングルマザーが、「昨日入ってきた高校生の女の子となんてほとんど同じ時給なのか」と相談してきたというものだった。

これに対して、あなたならどう答えるか。とりあえず、本書で述べてきたことを踏まえて私が回答例を書けば、以下の三つが考えられる。

回答①

①

回答②

②

回答③

③

こうした回答のうち、どれが正しいということはできない。それぞれ、別の価値観や、別の哲学にもとづいているからである。

戦後日本の多数派が選んだのは、回答①であった。しかし正社員の拡大には限界があったし、その残余となった非正規労働者との格差も生じた。若者や女性や大学院修了者から見れば、非合理としか映らない慣行も多数あった。

それでは限界があるとして、ではどういう改革の方向性をとるべきか。もし人々が、改革の方向性として回答②を選ぶなら、ある種の正義は実現する。しかし格差は別のかたちで拡大し、治安悪化などの問題もつきまとう。

回答③を選ぶなら、別の正義が実現するけれども、税や保険料の負担増大などは避けがたい。くりかえし述べてきたように、社会の合意は構造的なものであって、プラス面だけをつまみ食いすることはできないのだ。

この世にユートピアがない以上、何らかのマイナス面を人々が引き受けることに同意しなければ、改革は実現しない。だからこそ、あらゆる改革の方向性は、社会の合意によって決めるしかない。

いったん方向性が決まれば、学者はその方向性に沿った政策パッケージを示すことができる。政治家はその政策の実現に向けて努力し、政府はその具体化を行なうことができる。だが方向性そのものは、社会の人々が決めるしかないのだ。

(小熊英二『日本社会のしくみ 雇用・教育・福祉の歴史社会学』による)

注1 一九六三年の経済審議会が出した一連の答申「経済発展における人的能力政策の課題と対策」と題された答申。経済の高度成長を背景に、労働力の質的向上が必要であるとし、能力主義を徹底すべきだとした。

注2 労組Ⅱ労働組合の略称。産業別の労働組合など、特定の企業または雇用関係を超えて発展した欧米の潮流に対し、日本においては企業ごとの組合がむしろ主流となっている。

注3 高度プロフェッショナル制度Ⅱ高度の職業能力を有し、一定の年収要件を満たす労働者に対して、労働時間規制の適用除外とするもの。時間ではなく成果に応じて賃金が支払われる働き方を可能にするために導入された。

注4 エグゼンプションⅡホワイトカラー・エグゼンプションのこと。労働時間に対してではなく、成果に対して賃金が支払われる仕組み。

注5 残余型Ⅱ筆者の考える日本社会の三つの類型「大企業型」「地元型」「残余型」のうちの一つ。「残余型」は、大企業で長期雇用されておらず、かといって地元で農業や自営業などの職業に就くわけでもなく、都市部で非正規労働などをする働き方を指す。

一 傍線部(4)(5)(6)(8)のカタカナを漢字にする場合、それに使用する漢字を含むものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマ

クしなさい。解答番号は

(4) ソガイ

- 1 債務不履行でテイソした。
- 2 国民はソゼイの負担に苦しんでいる。
- 3 反対派の入場をソシする。
- 4 議会政治のケイガイ化を嘆く。
- 5 テンガイ孤独の身だ。

(5) ダイショウ

- 1 しばらく甘いカンショウに浸っていた。
- 2 全ての権限をショウチュウに収める。
- 3 負債をショウカンする期限が迫っている。
- 4 多くの建物が焼けてショウドと化した。
- 5 資金難で計画はアンショウに乗り上げた。

(6) ショッコウ

- 1 寺のシュウシヨクに話を聞いた。
- 2 法律にテイシヨクするおそれがある。
- 3 疑問をフツシヨクすることができた。
- 4 老後はセイコウ雨読の日々を送った。
- 5 趣味の会にドウコウの士が集う。

(8) サクゲン

- 1 警察署にソウサク願を出した。
- 2 論理にサクゴがあるかもしれない。
- 3 地主にサクシユされ農民は疲弊した。
- 4 辞退するのはトクサクではない。
- 5 先生に作文をテンサクしてもらう。

- 二 波線部(a)「利害と合意のゲーム」、(b)「何が合理的で、何が効率的か」、(c)「プラス面・マイナス面」、(d)「透明性や公開性」では、それぞれ波線を付した二つの言葉が並べて使われている。これらの二つの言葉の組み合わせの説明として、最も適当なものをそれぞれの1～5の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。なお、1～5の選択肢は複数回使っても構わない。解答番号は
- (a) 「利害と合意のゲーム」 5
- (b) 「何が合理的で、何が効率的か」 6
- (c) 「プラス面・マイナス面」 7
- (d) 「透明性や公開性」 8
- 1 もともと対立的に使われる言葉であり、文脈上も両立しない関係として使われている。
  - 2 もともと対立的に使われる言葉だが、文脈上は切り離せないものとして使われている。
  - 3 もともと対立的に使われる言葉だが、文脈上は一方が他方を包含する関係として使われている。
  - 4 必ずしも対立的に使われる言葉ではなく、文脈上もよく似たものとして使われている。
  - 5 必ずしも対立的に使われる言葉ではないが、文脈上は両立が難しい関係として使われている。

三 傍線部(1)「新しい合意」とあるが、筆者は「新しい合意」を作るためにはどのようなことが必要であると考えているか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 9

- 1 外国の雇用慣行を導入する際には、日本の労働者にもあらかじめその長所について説明しておく。
- 2 外国の雇用慣行を導入する際には、つまみ食いの的に移入するのではなく、全面的に受け入れる。
- 3 雇用慣行を変える際には、歴史的な経緯をふまえた上で、政府と経営者が同意する。
- 4 雇用慣行を変える際には、偶然の選択ではなく必然の選択であることを説明する。
- 5 雇用慣行を変える際には、労働者もプラス面とマイナス面の両方について理解して納得する。

四 傍線部(2)「士気の低下」という言葉の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

10

- 1 能力が低くなる
- 2 雰囲気が悪くなる
- 3 連帯感が弱まる
- 4 やる気が失せる
- 5 出世意欲が減退する

五 傍線部(3)「横断的な労働市場」とあるが、「横断的」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

11

- 1 会社という組織を超えて労働者が連帯している。
- 2 同じ年齢なら同一賃金が約束されている。
- 3 同じ職務や職種なら別の企業に自由に転職できる。
- 4 新卒だけではなくどのような年齢でも応募できる。
- 5 男性でも女性でも同じ職務を担当することができる。

六 傍線部(7)「小手先の措置」の例として、最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

12

- 1 高度プロフェッショナル制度を、企業が使いやすい形で導入する。
- 2 これまで慣例だった年功賃金を廃止して、成果主義を導入する。
- 3 昇進・採用における透明性は高めるものの、年功賃金と長期雇用は維持する。
- 4 同一労働同一賃金の「職務の平等」を可能な限り進める。
- 5 残業代の適用外の働き方など、「正規」とは異なる労働者の働き方を認める。

七 傍線部(9)「回答例」とあるが、空欄①、②、③には、次のA、B、Cのいずれかの「回答例」が入る。これについて、後の(一)(二)(三)の問いに答えなさい。

A 賃金は労働者の生活を支えるものである以上、年齢や家庭背景を考慮するべきだ。だから、女子高生と同じ賃金なのはおかしい。このシングルマザーのような人すべてが正社員になれる社会、年齢と家族数にみあった賃金を得られる社会にしていくべきだ。

B この問題は労使関係ではなく、児童手当など社会保障政策で解決するべきだ。賃金については、同じ仕事なら女子高生とほぼ同じなのはやむを得ない。だが最低賃金の切り上げや、資格取得や職業訓練機会提供などは、公的に保障される社会になるべきだ。

C 年齢や性別、人種や国籍で差別せず、同一労働同一賃金なのが原則だ。だから、このシングルマザーは女子高生と同じ賃金なのが正しい。むしろ、彼女が資格や学位をとって、より高賃金の職務にキャリアアップできる社会にしていくことを考えるべきだ。

(一) ①、②、③それぞれの空欄に入る回答例A、B、Cの組み合わせとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 13

- |   |     |     |     |   |     |     |     |   |     |     |     |
|---|-----|-----|-----|---|-----|-----|-----|---|-----|-----|-----|
| 1 | ①—A | ②—B | ③—C | 2 | ①—A | ②—C | ③—B | 3 | ①—B | ②—A | ③—C |
| 4 | ①—B | ②—C | ③—A | 5 | ①—C | ②—A | ③—B | 6 | ①—C | ②—B | ③—A |

(二) 回答例A、B、Cのそれぞれの方針を採用する場合に考えられる現象や施策の組み合わせとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 14

- |   |             |             |             |
|---|-------------|-------------|-------------|
| 1 | A—年功賃金      | B—公営住宅の整備   | C—職務給       |
| 2 | A—職務給       | B—経営権の維持    | C—大学院進学率の上昇 |
| 3 | A—経営権の維持    | B—年功賃金      | C—公営住宅の整備   |
| 4 | A—公営住宅の整備   | B—大学院進学率の上昇 | C—年功賃金      |
| 5 | A—大学院進学率の上昇 | B—職務給       | C—経営権の維持    |

(三) 回答例 A、B、C はそれぞれの価値観にもとづく社会改革の方向性の対立であるが、筆者自身はどのような道を採用すべきと考えているか。

最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 15

- 1 A のように、年功序列など、労働者の年齢や家庭背景を重視する道を採用すべきと考えている。
- 2 B のように、賃金の公平とともに、社会保障政策で労働者の生活を守る道を採用すべきと考えている。
- 3 C のように、同一賃金同一労働を徹底することで、透明性を確保する道を採用すべきと考えている。
- 4 A B C の長所を採り、経験や努力を評価し、賃金の公平性を保ちつつ保障を拡充する道を採用すべきと考えている。
- 5 A B C いずれであれ、雇用には歴史的経緯があり、各企業組織の事情に合った道を採用すべきと考えている。

八 筆者は社会のしくみを変えるにあたって何が大事だと考えているか。問題文全体の趣旨をふまえて、最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 16

- 1 企業が社員の採用や昇進の際などに、基準や過程を公表して透明性を高める。
- 2 学位取得競争を通じて、職務にふさわしい実力を身に付けられるようにする。
- 3 企業が社員一人一人の努力に目を配り、それを給与に反映させる。
- 4 国が社会保障を拡充させて、長期にわたって働き続けなくてもよくする。
- 5 働きすぎを防ぐために、国が労働基準監督署の力を強める。

## 第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

朝食をすませ、小雨のなかをホテルから歩いて五分ほどの銀行に行くと、いかめしく武装した警官がとりまいていて、近寄ることもできない。しかしがた強盗事件があったのだという。私は旅行小切手<sup>注</sup>をリラに替えるだけの用事だったから、かならずしもそこでなくてよかったのだけれど、またか、と気がめいった。五日まえ、ローマに着いてから、銀行の手続きが一度で済んだことがなかった。

私が行ったのは、ひと騒ぎ終ったあとだったのだろう、肩にかけた機関銃<sup>(1)</sup>のもののしきのわりには鼻唄<sup>はなうた</sup>でもうたいだしそうな表情の警官が、雨のなかを物見高く見物にやって来た近所の人たちと話しこんでいる。私が近づくと、銀行は午後から、と訊<sup>き</sup>いてもいないのに教えてくれた。

何人かの友人に会い、いくつかの所用を果たすために、十日間の予定でローマに滞在していたのだが、東京とは異った生活のリズムにうまく乗れなくてうろろろすることばかり多くて、予定の半分も処理できないまま、時間が過ぎていった。一九九一年の春で、いま思うとイタリアの人たちは、労働問題でも治安の面でも最悪といわれた社会状況に疲労困憊<sup>こんぱい</sup>していた。しぜん、旅行者も彼らの気分<sup>こんぱい</sup>に巻きこまれ、思い通りに事が運ばないと、必要以上に機嫌をそこねた。そのうえの雨つづき、これが四月のローマの空とは信じられないほどの悪天候だった。

夕立というなつかしい言葉が夏の日本にはあるが、ローマ<sup>(3)</sup>のアクワツツォーネは、ほとんど季節には関係なく降るにわか雨だ。アックアという水、あるいは雨をさす言葉を拡大語尾で変化した言葉で、どしゃ降り雨をいうが、ローマ名物でもある。道を歩いていて、ふと、頬にふれる風が妙につめたいような気がする、あたりが夜みたいになったとたん、目もあけていられないほどの雨が、しぶきをあげて降ってくる、それがほとんど同時だ。それこそ、槍<sup>やり</sup>が束<sup>む</sup>になって落ちてくるみたいで、たいいていの場合<sup>こゝろ</sup>は激しい雷を伴ってくるから、通行人は、首をすくめ、足が濡れないように気づかいながら、いちばん近い建物の軒下に避難して、轟音<sup>ごうおん</sup>のなか、天を仰いで雨が通りすぎるのを待つしかない。車を運転しているときなどは、ワイパーがきかなくなるので、道路わきに寄って待つ。長くて三十分、短いときならほんの十分ほど、息を殺すようにして雨宿りしていれば、雨はやみ、あの吸いこまれそうな紺碧<sup>こんぺき</sup>の空が戻ってくる。立ちおくれたきれぎれの雲が、大いそぎで空を渡っていくと、それに合わせるみたいに、公園や大通りの並木でスズメが騒ぎ出し、街はもういちど車の音に満たされる。アクワツツォーネは、なにごとく巨大好きのローマ人らしい、大仰でさっぱりした一瞬の大雨だ。

でも、その春、私を憂鬱<sup>ゆううつ</sup>にしていたのは、あの豪快でどこか祝祭<sup>しゆさい</sup>してみたアクワツツォーネではなくて、朝から晩まで、そして夜が更けてもまだ、しずかに降りつづける細かい雨だった。ナヴォーナ広場に近い、新緑がまぶしい蔦<sup>つた</sup>のからまる古い館ふぜいの小さなホテルの出入りにも、私は片手

に傘をさし、もう一方の手で調子をとるようにして時ならず散り敷いた若葉にヒールがすべらないように爪先でよけながら、一步、一步、用心しながら歩かねばならなかった。黒く変色したものもあり、鮮やかな新緑のままもある落葉は、青黒く光る玄武岩の石畳のうえに、厚ぼったく重なつて濡れていた。

この銀行がだめなら、いつそのこと都心まで出よう。そうあきらめると私は、バスには乗らないで、裏道をよこぎって行くことにした。どうせ十分そこそこの道のりにすぎないし、都心まで行けば銀行ぐらいどこにでもある。

どの道を通っても思わず立ち止まって眺めてしまうような建物や人間に会うことのすくない東京とはちがって、ローマの街には（そしてたぶんヨーロッパのどこの街にも）、歩くだけで映画を見るように愉よしかったり、感心したりする道が数えきれないほどある。たとえば、テヴェレ河に平へい行したヴィア・ジュリア。この道を私が発見したのは、数年前、ローマに半年ほど滞在したときだった。そのときは友人の家に居い候まをらしていたのだが、ある日、昼食のためのワインを買いに出て、ぐうぜんに見つけたのだった。道の一角に立っただけで、なにかあたりを払はらう品格（5）のようなものが漂ひらっていて、おもわず足を停めた。テヴェレ河畔の道からは一段低い側道になっているために、車の往来がすくないことのおかげは、平坦へいたんでひたすらまっすぐな道路にすぎない。それでいて、どこまでも歩いて行きたくなるような、怪しい魅力がある。歩いてみると、それほど長くない道で、三百メートルほど先で湾曲するテヴェレに突き当たって、消滅していた。

家に戻ってその道の来歴を旅行案内書で調べると、やはり由緒ある道だった。十六世紀のはじめに建設されたローマ最初の直線道路で、建築家のブラマンテにときの教皇ジュリオ二世が命じて設計させたものだという。建築家が道路を設計したということも、私には新鮮な驚きだったが、この道路の美しさは、道路そのものというより、両側にならんだ後期ルネッサンス建築の等質性と、四、五階建てだろうが、建物の屋根の線がえがく遠近法的な先細りする二本の線によって、道路（6）という虚構を演出していることにあるのではないか。じっさい、道は先に行くにしたがって、すこしずつ細く造られているようで、美しいファルネーゼ宮の庭園で終わっている。

もうひとつ、この道が私の興味をそそったのは、それが「ローマ最初の」直線道路だという説明だった。まっすぐな街路、というのを、私はずつと西欧のいわゆる論理的思考の産物と考えていたから、古代はいざ知らず、中世には、この都市にも直線道路の思考が欠落していたという発見は衝撃的だった。中世の勝手気ままな曲線に対する、ルネッサンスの整理された直線。そして、私には貧しい中世の気ままさも捨てがたく思えた。まっすぐな道路が示す幾何学的な虚構への憧憬（7）と、人間の現実をそのまま具象化したような中世の道への郷愁。

強盗が出て行ったばかりの銀行も（襲撃は成功したのだろうか。怪我人けがにんはなかったのか）、正面入口は交通量の多い「りっぱな」道路に面してい

でも、裏手は、くねくねと曲りくねった細い道が網目のようにはりめぐらされた区域だった。こんな日は、中世の道を歩いてみたかった。

角を曲るとヴィア・デル・ゴヴェルノ・ヴェッキオ、旧政庁通り、と名前だけはりっぱな通りだった。テヴェレ河を背にナヴォーナ広場やパンテオンに近いこの辺りは、じつさい、直線的な表通りからは想像もつかないような陽のあたらないじめじめした街路が、まるでモグラの穴を地上に再現したみたいに、入りこんでいる。ひとつ筋をまちがえると、とんでもないところに出てしまったり、ひどいときにはもういちど出発点に戻る破目になったりするけれど、それだけにいったん地図をのみこめば、表通りのように「人に見せるため」につくった道ではないから、気取らない、どこか **X** しているローマを、そつと肩ごしに覗きこむといった、そんな通りが続いている。店先に積みあげた品物を売りたいのか、ただ積みあげてあるだけなのか、判断に苦しむような古着屋が軒をつらねているかと思えば、揮発性のつよいニスの臭いがたちこめる中で、職人が時代物の家具をみがいたり、塗りがえたりしている店のとなりには、自動車の電気系統だけを修理する店があったり。うっかり見すごすような間口の狭い書店が、いったん中にはいってみると奥が知れなくて、思わず時間をつぶしてしまうこともある。探していた本に、こんな場所では出会う稀まれな愉たのしみも棄すてがたい。石畳の道路には水はけ用の溝がないから、今日みたいな雨の日は、低くなった中央をちよろちよろと流れる泥水が足を汚さないよう、気をつけながら、ときには野菜くずの浮いた水たまりを跳びこえて行く。歩道もないその狭い道を、車もネコも人も機嫌わるくゆずりあいながら歩いている。両側の建物はたがいに競りあうように天に向かって伸びていて、ずっと上のほうに、細い灰色の帯のような空がみえ、そのことにほっとしてしばらく立ち止まると、壁をつたって降ってくる雨を眺めた。

(須賀敦子『トリエステの坂道』による)

注 リラ二〇〇二年まで使用されていたイタリアの通貨の単位。

一 傍線部(1)「ものものしさ」とあるが、形容詞「ものものしい」に最も近い意味をもつ語を次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

解答番号は

17

- 1 恐ろしい
- 2 仰々しい
- 3 力強い
- 4 うつとうしい
- 5 危ない

二 傍線部(2)「物見高く」とあるが、「物見高い」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

18

- 1 うわさを好む
- 2 騒がしい
- 3 口うるさい
- 4 困難をものともしない
- 5 好奇心が強い

三 傍線部(3)「アクワッツォーネ」について筆者はどのように感じているか。最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

19

- 1 アクワッツォーネは激しい雷を伴う雨で、人も車も通行できなくなるほどなので、憂鬱な気持ちになる。
- 2 アクワッツォーネはあたりが暗くなった途端に突然に降ってくるので、予測ができず、一日の計画が立てられない。
- 3 アクワッツォーネが終わるとあつという間に元通りの風景が戻ってくるため、お祭りのように思える。
- 4 アクワッツォーネは日本の夕立とは違って季節に関係なく降るので、情緒を感じることができない。
- 5 アクワッツォーネはイタリア名物のどしゃ降り雨なので、遠い異国に来たことを実感する。

四 傍線部(4)「ヒールがすべらないように」とあるが、この「ように」と文法的に同じ意味のものを次の中から一つ選び、その番号をマークしな

さい。解答番号は

20

- 1 まるで王女様であるかのように傲慢に振舞っている。
- 2 明日、弁当を持ってくるように友人に伝えた。
- 3 テストでよい成績がとれるように十分予習しておく。
- 4 先週言ったように今日は小テストを行います。
- 5 あなたの考え方は間違っているように思う。

五 傍線部(5)「あたりを払う」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 21

- 1 周囲の人々の眼をひきつける
- 2 宗教的なおごそかさを感じさせる
- 3 見る者の気分を高揚させる
- 4 そばに寄れないほど堂々としている
- 5 周辺を一掃して美しくする

六 傍線部(6)「道路という虚構を演出している」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

解答番号は 22

- 1 道路の両側にある建物の等質性と屋根の線のえがく遠近法的な二本の直線が、そこに人工的で幾何学的な空間を作り出している。
- 2 道路の両側にある建物の等質性と屋根のえがく直線が、すこしずつ狭まっている道路に演劇的な面白さを付け加えている。
- 3 道路の両側にある建物の屋根のえがく曲線と道路の先細りする直線とが融合して、幻想的な美しさを生み出している。
- 4 後期ルネッサンス建築の等質性と屋根の線のえがく遠近法的な二本の直線が、西欧の論理的思考を具現化している。
- 5 後期ルネッサンス建築の等質性と屋根がえがく線が、それ以前に造られた直線道路の歴史的な価値をさらに高めている。

七 傍線部(7)「人間の現実をそのまま具象化したような中世の道」の例として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

い。解答番号は 23

- 1 建築家のブラマンテが設計した道
- 2 ファルネーゼ宮に至る先細りした道
- 3 西欧の論理的思考の産物としての道
- 4 旧政庁通りのような入り組んだ道
- 5 ヴィア・ジュリアのようなまっすぐな道



第三問 次の文章は、明治時代の恋愛観について論じたものである。冒頭の「彼」は評論家および教育者として活躍した巖本善治のことを指している。これを読んで、後の問いに答えなさい。

彼は一八九一（明治二十三）年に「婚姻論」という論文で、「婚姻は神聖の事なり」と断言する。しかし、あらゆる結婚が神聖なのではない。自ら結婚相手を選び求めて、愛し愛されるとき婚姻は神聖なものとなる。その理由を巖本は次のように言う。

われ未だ心を決しわざとながら人を我身と均しく愛することを得ざりき、ただ「つま」に対して初めて此美しき心を振り起すことを得たり。而して此は肉親の刺激自ずからに我を動かすにあらず、我の霊、かく決し、かく行い、かく樂しめるもの也。……夫妻は之れ天地間唯一の同等者なり、初めて同等者の間に行わゆるべき真の友情を味わうことを得。……われは、「つま」によりて、人類の真命を幾分か悟ることを得たり。  
……「つま」を得て、……我は我が最上の靈性を發達したり。

肉親に愛情を抱くのは自分と血のつながりがある以上、自然なことだが、夫婦とは赤の他人同士である。にもかかわらず、赤の他人である相手とわが身と同じように愛することができるのだとしたら、その愛は自己愛や肉親に対する自然な愛情を超えたものとして、高い精神性を備えている。この高い精神性を備えた愛において、赤の他人であった二人は、対等な者同士として、人格と人格で深く結び付くことができる。それゆえ、愛をもつて結婚することを巖本は「美しき心」と呼び、そこから、キリスト教的な靈性に至ることができると考えた。婚姻関係が神聖であると言われるのは、美しき心を開示し、靈性への道を開くものだからである。

こうした神聖な婚姻に至るために、「恋愛」は不可欠である。神聖な婚姻は、何よりも愛に基づいていなければならない。そのためには、自らが愛することのできる相手を見つけないといけない。そのような相手は、周りによってお膳立てされる見合いや親の決めた関係のうちには見出されないだろう。それゆえに、<sup>(2)</sup>恋愛は避けて通れないものであり、男女が知り合い、交際を持つことは重要である、と巖本は「男女交際論」という評論において説いている。ただし、その交際はプラトニックな精神の交わり、「情交」でなければならない。肉欲を戒め、精神と肉体を分離して考えるキリスト教に則り、彼もまた精神的な関わり「情交」に対して、肉体的な関係があることを「肉交」と呼んで忌避した。「love＝愛情」と呼ぶにふさわしい事態は、プラトニックな情交の上で打ちたてられる関係だけであり、「恋愛」とはこの「love」によって成立するものなのだ。こうして、

神聖な結婚へ至るための、プラトニックで精神性の高い恋愛という考え方が成立するに至る。友愛結婚を目指す彼にとって恋愛は欠かせないものである。それゆえ、巖本は、「恋愛」を批判する人びとに対し、「非恋愛を非とす」（一八九二〔明治二十四〕年）というタイトルで論をおこし、「恋愛は神聖なるもの也」と反論し、恋愛の重要性を訴え続けた。

「恋愛は神聖である」という考えに多くの知識人が **X** された。愛に基づき女性と男性が平等な関係を築き、自らの意志で結婚を選ぶという男女の自由で対等な交わりは、いわば西洋近代文明の象徴だったと言えるだろう。一方で、このような恋愛観は、それまでの日本における男女関係を批判的な形で浮き上がらせた。特に『女学雑誌』に集った人びとは、キリスト教的な霊肉二元論から、それまでの「色」や「恋」と呼ばれるあり方を批判した。『女学雑誌』二五四号には次のような言葉がある。

俗に之を男女の情愛と云う。この心情に二様あり。英語に一を「ラップ」と云い一を「ラスト」と云う。「ラップ」は高尚なる感情にして「ラスト」は劣等の情欲なり。邦語には確然たる区別なし。……今日は「色」と云い「恋」と云い、或は「色恋」と云う熟語の如きは（少なくとも俗語には）已に一定の意義あり。余は飽く迄も是等の語と「愛情」という聖語を混同せざらんことを望む。

江戸時代の「色」や「恋」という言葉は、もちろん異性への恋心を意味するが、それと同時に、相手との肉体的な交わりへの欲求が含まれている。そもそも、これらの言葉は、相手に恋心を抱くことと、肉体的な関係を持つことを区別していない。相手に好意を抱くことは即、肉体的な交わりを持ちたいと願うことであり、こうした恋心と性的欲望が重なり合ったところで「色」や「恋」という言葉は成立していた。この点を捉えて、『女学雑誌』のメンバーたちは、「色」や「恋」が性的欲望に基づく「ラスト」にすぎず、精神の交わりである「ラップ」の高尚さに対して、低級なものであると切つて捨てる。その際、批判の対象となったのが、芸者であり、遊郭で結ばれる男女関係であった。そして、特に激しい批判を繰り返す。恋愛の神聖性をさらに高める役割を果たしたのが、北村透谷である。

透谷こと北村門太郎は、一八六八（明治元）年、相模の没落士族の家に生まれた。その後、両親が上京し、東京で育つ。東京専門学校で学んだ彼は、自由民権運動に身を投じるも、彼が参加した段階で、自由民権運動は政府による取り締まりが厳しくなるなか、次第に退潮になっている頃であった。やがて大阪事件の後に、透谷は政治から離れることを決意する。同時に、商売上の野心を抱くがこれもあえなく挫折し、彼の人生は危機に瀕する。だが、この危機はひとりの女性と出会うことで **Y** される。それこそが、彼の伴侶となる石坂美那である。美那は自由民権運動家の

石坂昌孝を父に持ち、透谷はこの人物のもとを訪れた際、娘の美那と知り合った。このとき、透谷十八歳、美那は二十一歳である。横浜共立女学校で学び、この時すでにキリスト教の洗礼を受けていた美那との出会いは、透谷のその後の人生を切り開ききっかけとなった。彼は彼女の導きによって、キリスト教の信仰にめざめ、そして、二人は恋愛関係に落ちる。信仰を持ち、知的水準も高い彼女は、彼にとって神聖なる恋愛の相手としてふさわしい存在であり、自分たちの恋愛は、従来の日本人の恋とは違うという強烈な自負が彼にはあった。

日本人のラブの仕方は、実に都合の能き（御手前主義）訳に出来て居ります。彼等は情欲に由ってラブし、情欲に由って離るる者にしあれば、其手軽るき事御手玉を取るが如し、吾等のラブは情欲以外に立てり、心を愛し、望みを愛す、吾等は彼等情欲ラブよりも最ソツト強きラブの力をもてり。

これは結婚前の透谷が美那に送った手紙の一節である。肉体的に魅かれ合うことを情欲と批判し、自分たちは心の結び付きによる強い「ラブ」の関係を構築することを訴えている。そこにあるのは、従来の男女関係への強い批判である。この手紙を美那はどのような気持ちで読んだのだろうか。実は彼女にはこのとき透谷とは別に婚約者がいた。しかし、その後、二人は周囲の反対を押し切って、一八八八（明治二十一年）年に結婚する。美那は自ら透谷を選び、透谷もまた美那への想いを貫く。それはまさに互いの心を求める神聖な恋愛であり、愛し合う者同士の結婚であり、巖本が言うところの「友愛結婚」の理想そのままの夫婦であるように見える。

先の美那宛ての書簡からもわかるように、透谷もまた他の『女学雑誌』のメンバーと同じく、従来の日本における男女関係を霊肉二元の視点から批判している。だが、彼が「恋愛＝ラブ」を称揚し、従来の男女関係を批判するのは、単に霊と肉の問題からではない。それよりも、両者の関係における想いの質、ふるまいの形こそが問題なのだ。<sup>(5)</sup>そこが透谷の議論の新しさであった。

「恋愛」の独自性とは何か。その点を彼は「粹を論じて」「伽羅枕」に及ぶ」という評論で、「粹」と「恋愛」を対立的に捉えることから論じている。一八九二（明治二十五年）年頃に書かれたとされるこの小品で、透谷は尾崎紅葉の新聞小説『伽羅枕』を題材に、遊郭で育まれた「粹」と呼ばれるひとつの理想について分析する。（中略）彼は恋愛と粹を対比し、次のように語り出す。

恋愛の性は元と白昼の如くなり得る者にあらず。……恋愛が盲目なればこそ痛苦もあり、悲哀もあるなれ、また非常の歓楽、希望、想像等もあ

るなれ。……然るに彼の粹なる者は幾分か是の理に背きて、白昼の如くなるを旨とするに似たり。盲目ならざるを尊ぶに似たり。恋愛に溺れ感う者を見て、粹は之を笑う、<sup>(6)</sup>総じて迷わざるを以て粹の本旨となすが如し。粹は智に近し、即ち迷道に智を用ゆる者。

遊郭の中で男女関係を楽しむことを目的とする粹にとって、相手への激情に囚われることは、関係の破綻を意味する。それはたとえば、真剣に愛し合った客と花魁おいらんの最後は、心中しかないという形でも明らかで、関係を維持するには、つかず離れずの距離を保って、遊びと真剣の、虚と実のあいだを往来するしかない。しかし、そのようなつかず離れずの距離を保つのは、容易なことではない。相手を見て、自分を振り返り、近づきすぎないように、しかし、遠ざかってしまわぬよう、つねに、醒めた心をもって状況を把握する必要がある。そこでは、透谷が「粹は智に近し」というように、合理的な判断が求められる。こうした冷静な距離感覚を、彼はすべてが白日に晒さらされる「白昼の如くなり得る者」と言った。昼の光のもと、醒めた心で相手との距離を測る粹に対して、恋愛は「闇」である。恋の激情に囚われ、周りが見えなくなった者はまさに「盲目」であり、そこに冷静な知など働きようがない。ほんの少し彼女がこちらを向いたと歓喜し、知らない男と彼女が話しているのを見て嫉妬に狂う。それは正気を失った「溺れる者」であり、冷静な目を持つ粹な人からすれば、お笑い草の、みつともない人間だろう。しかし、この激情にこそ、恋愛の意味があると透谷は言う。愛する者への激しい想いに囚われたとき、人は、日常的な出来事が見えなくなり、自己を理性的に律することが難しくなる。だが、日常性が破壊され、理性という自己を守る枠組みが溶け出すときにこそ、日々の生活を超えた神聖さや高潔さが宿るのではないか。少なくとも透谷はそうのように考え、恋の激情がもたらす、歓喜や苦悩、あるいは悲哀といった、心を大きく揺さぶる感情を求めた。だからこそ、彼は粹の合理的な態度を批判し、盲目的な恋の激情を求めた。激情に身を委ね、狂気に近い想いの中で、はじめて恋愛は成立するのである。

恋愛に宿る激情とその盲目性、それこそが透谷の見出した恋愛のあり方である。だが、そのとき透谷は、巖本の「友愛結婚」をベースとした穏やかな「ラブ」観から **Z** することに<sup>(7)</sup>なった。巖本の考える「恋愛」は、「友愛結婚」の手前であって、互いに好意を持つ者同士がその想いを確かめ、育むことで、愛ある家庭を築くためのもので、きわめて穏当なものであった。恋愛の神聖さは、その穏やかなラブゆえに成立するもので、そこに「激情」や「盲目」が入る余地はない。しかし、透谷は穏やかさではなく激しさを、落ち着きよりも狂気に近い盲目を求めた。だとすれば、その恋愛は巖本と同じように結婚にたどりつくことができるのだろうか。彼は、彼の目指した恋愛によってどこに向かおうとしているのだろうか。

(宮野真生子『なぜ、私たちは恋をして生きるのか——「出合い」と「恋愛」の近代日本精神史——』による)

一 傍線部(1)「つま」を得て、……我は我が最上の靈性を發達したり」とあるが、巖本がそのように考えた理由として**適當でない**ものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **30**

- 1 妻を愛することによって、神の人間に対する愛を実感することができるから
- 2 妻に対する愛は、血がつながった者に対する愛よりも高い精神性を備えているから
- 3 妻と夫は、人格と人格が対等に結びつくような関係を築くことができるから
- 4 愛に基づく結婚をすることによって、「美しき心」を実現することができるから
- 5 対等な夫婦の関係の中にこそ、キリスト教的な精神性を備えた愛が存在するから

二 傍線部(2)「恋愛は避けて通れないもの」とあるが、その理由として最も適當なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **31**

- 1 恋愛は精神と肉体を統一するための唯一の手段であり、それによって神聖な結婚が実現するから
- 2 神聖な結婚には愛が必要であり、周囲から決められた結婚ではそのような愛は望むことができないから
- 3 親によって決められた結婚を拒否する場合には、自分で相手を探さざるをえないから
- 4 近代的な結婚を実現するためには、自分にふさわしい相手を自分の力で探さなければならぬから
- 5 理想的な結婚をするためには、結婚前に一度はプラトニックな恋愛を経験しておく必要があるから

三 空欄 X・Y・Z に入る語として最も適當なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

Z	Y	X	解答番号は
<b>34</b>	<b>33</b>	<b>32</b>	<b>32</b>
1 逆転	1 実現	1 幻惑	34
2 逸脱	2 停止	2 困惑	
3 突破	3 展開	3 打倒	
4 発展	4 増進	4 魅了	
5 否認	5 回避	5 管理	

四 傍線部(3)「キリスト教的な霊肉二元論」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

35

- 1 キリスト教では、神は霊的な存在で、人間は肉体的な存在だとしている。
- 2 キリスト教では、肉体を否定すれば精神は成り立たなくなると考える。
- 3 キリスト教では、精神と肉体の欲求の両方を満たすことがよいとされている。
- 4 キリスト教では、人間は精神と肉体が高い次元で統一された存在だと考える。
- 5 キリスト教では、精神と肉体を対立的にとらえ、肉体の欲求は悪と考える。

五 傍線部(4)「ラップ」とあるが、『女学雑誌』のメンバーは「ラップ」と日本の従来の「色」や「恋」との違いをどのように考えていたか。そ

36

- 1 「ラップ」は男女がお互いを思う自然な気持ちであるが、「色」や「恋」は遊郭での金銭を媒介にした低級な男女関係である。
- 2 「ラップ」は高尚で神聖な愛情であるが、「色」や「恋」は日常の親しい人に対するありふれた情愛であるため低俗である。
- 3 「ラップ」は結婚に結びつくような真剣な愛情であるが、「色」や「恋」は遊郭などでみられる遊びの男女関係である。
- 4 「ラップ」は精神的な愛情であって尊いものであるが、「色」や「恋」は性的な欲望を含んでいるため低俗である。
- 5 「ラップ」は西欧近代文明の象徴であるが、「色」や「恋」は江戸時代の粋の理想に基づく古い男女関係である。

六 傍線部(5)「そこ」が指すことの説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 37

1 激情に囚われることのない粹な恋が評価されてきたことを批判し、金銭で結ばれるような男女関係ではなく、精神的な男女関係こそ神聖な恋愛であると主張したこと

2 恋愛は理性で律することができない激情的なものであると考え、理性的な男女関係を批判し、理性が失われることによって日常を超えた神聖さが生まれるとしたこと

3 遊郭での恋が、霊よりも肉を重んじる男女関係だという理由から批判されてきたのに対し、お互いにつかず離れずの距離を保つ擬似的な恋愛である点を問題にしたこと

4 狂気に近いような激情があつてこそ恋愛は成立すると考え、恋愛の精神的な側面を重視する考え方を受け継ぎながら、恋愛の理性を超えた肉体的な側面にも目を向けたこと

5 穏やかで理知的な男女関係がよいとされた考え方を受け継ぎながら、日常性が破壊され理性が失われてしまうようなときにこそ、恋愛が初めて成立すると考えたこと

七 傍線部(6)「総じて迷わざるを以て粹の本旨となすが如し」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

解答番号は 38

1 大体のところ恋を遠ざけることをもって粹の本質とするようだ

2 全般的に恋に迷わないようにするために粹がもとから存在するようだ

3 全体に恋の激情に囚われることをこそ粹自体の目的とするようだ

4 概して恋に盲目的にならないことを粹本来のねらいとするようだ

5 一般的に恋に溺れ惑われないことによって粹が本来に生まれるようだ

八 傍線部(7)「その恋愛は巖本と同じように結婚にたどりつくことができるのだろうか」とあるが、筆者はどのようにしてこのような疑問をもったの

か。その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

39

- 1 透谷の考える精神的な恋愛は、霊肉二元論に基づくものではないから
- 2 透谷の考える狂気に近いような恋愛は、肉体的な要素を持たざるをえないから
- 3 透谷の考える激情的な恋愛は、結婚に至るような穏やかな恋愛とは相容れないから
- 4 透谷の考える盲目的な恋愛は、理想とされてきた結婚制度を破壊せざるをえないから
- 5 透谷の考える溺れるような恋愛は、相手を傷つけるもので、穏やかな結婚生活にはつながらないから